

## 大学は緒方洪庵の適塾に学べ

うわべだけのグローバル化よりも教育改革を

高部英明 ドイツ・ヘルムホルツ研究機構上席研究員、大阪大学名誉教授

日本の国立大学が改革を迫られている中、大阪大学の国際化に<sup>2015年07月17日</sup>過去6年、深く関与してきた。私は1960年に発明されたレーザーの大規模化・極限化により拓かれる新学術研究が専門である。大規模装置による科学研究の世界ではグローバル化は当然で、世界の研究者との協力と競争を模索している。大規模装置は必然的に大型予算となり、全学術分野の中での優位性を主張し、認められなければ実現しない。そして、予算を獲得した研究機関には世界中の研究者が利用のため集まる。知の拠点ができる。そこでは全てが国際的で同時に学際的でもある。

文科省は2008年、当時の福田康夫総理の「[留学生30万人計画](#)」方針演説を根拠に通称「グローバル30」という大学国際化の補助事業を公募した。阪大は学部2コース、大学院2コースの新設を提案し、採択された。とっくの昔から国際共同研究をしてきた私は、その大学院の「[国際物理特別コース](#)」の申請、制度設計に関わり、初代コース長を拝命することになった。そして5年間、コース長を務めながら、大学の国際化に関する情報や同僚の意識に注目してきた。



阪大「グローバル30」ロゴと、国際物理特別コース第1期博士前期課程入学生達と筆者 = 2010年10月

4年前には、新しく総長に選出された平野俊夫氏が「2031年の創立100周年には大阪大学は世界トップ10の研究型総合大学として輝く」と所信表明した。私の知る限り実現は無理だと直感し、総長に詳細なデータなど提供すべく、世界大学ランキングの背景や米国、欧州、アジアの大学の調査も行ってきた。

そして私は9月に早期退職し、ドイツ・ドレスデンの研究所に転職する。すると、国際化仲間が「遺言」を残せと、講演の場を用意してくれた。そこで報告した「阪大国際化への五つの課題」は、以下のようなものだ。

- (1) 教員自体の国際化意識が低い。国際化はボランティア教員頼みに墮している。
- (2) 優秀な留学生を経済支援する財源がない。十分な奨学金なくして質の高い留学生は確保できない（日本で最低限の生活には、生活保護者の受給月額13万円が必要）。
- (3) 一般に、阪大の学生・大学院生が英語での会話を避けたがる傾向がある。英会話力だけでなく、日本の歴史、文化、政治、経済などに興味津々の留学生に説明する「教養」に欠けているため、会話が成立しない。結局、大学内に留学生のコミュニティが出来てしまう。
- (4) 事務と連携した留学生の受け入れ体制ができていない。英語の読み書きができない事務員が国際部に配属され3年後には配置転換される。

(5)阪大教員の国際関係個人情報（どの国の研究者と共同研究しているかなど）のデータベース化ができていない。

これらの課題にどのような解決策の私案を出したかは[私の個人ページ](#) を見ていただくとして、これら以上に大きな課題がある。財政基盤である。[米国では1兆円を越える「基金」（貯金）を持っている大学が10校以上ある](#)。一位のハーバードは4兆円。これを投資運用して毎年10%以上、増やしている。利益の半分は積み立て、半分を使うと年間2000億円以上の基金が使える。我が国の100近い国立大学への文科省から交付される運営費総額は約1兆円。阪大へは約500億円だ。阪大の年間予算が約1400億円、ハーバードの基金運用利益だけで4000億円。どうしようもない格差だが、ハーバードも1970年代初頭には基金がない状態だった。米国の大学はどこも経営努力をしている。

課題(1)の原因は「学部・研究科の自治（部局の自治権）」にある。たとえば、理学部は大学の方針より理学部教授会決定が優先する。教授たちは概して保守的である。定年まで身分保障され、面倒な国際化を避けたがる。

課題(3)は英語力やコミュニケーション力の問題ではない。「教養」の問題だ。大学は「大きく学ぶ」ところ。しかし、入学しても受け身の講義主体の教育だ。さらに、1年から専門教育も始まる。どうも日本の大学は専門学校になりはてている。これも部局の自治と戦わないと変わらない。なぜなら、教授たちも専門バカが多く、教養力が学生の将来にいかに重要か想像できないからだ。

大学は、学生が主体的に勉学する習慣を育む場である。例えば、10人程度のグループに分け、課題を出し、調べさせ、発表させ、議論させ、批判させる。そして、皆が、論理的議論を身につけ、批判精神を学び、多様な意見（異見）を理解し、柔軟な頭脳を培う。テーマは理系・文系関係なく広い分野をカバーする。グループも学部横断が望ましい。各グループでは教員、博士院生がチューターとなる。

大阪大学は緒方洪庵の「適塾」を源流としている。適塾で若き日を学びに過ごした福沢諭吉の『福翁自伝』にその教育理念が描写されている。緒方洪庵は講義などしていない。彼は、志ある若者に、寝場所と食事を与え、書物を利用する場を提供しただけである。福沢たちは医学、砲術、造船など、手当たり次第に蘭書を読み、自学自習し、「会読」という発表・議論の場で能力を磨いている。そして、柔軟な思考力を培った。後年、福沢は江戸に出て、横浜で英語の看板が氾濫しているのを見て、「これからは蘭語でなく英語の時代だ」と英語を独学した。

阪大には国際化の源流がある。もう一度、そこに立ち返り教育改革をしなければ、うわべの国際化など世界的競争力を持たない。これは阪大に限る話ではない。**論**

---

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.